

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 澤岷 圭祐 所属: 沖縄県立鏡が丘特別支援学校

記録日: 平成 28 年 2 月 13 日

キーワード: 肢体不自由、教科学習、学習保障

【対象児の情報】

○高等部 3 年の女子生徒 A

○障害と困難の内容 (主たる障害は◎)

□肢体不自由 (◎)

■読み書き障害

■構音障害

- ・ 脳性まひ(アテトーゼ型)により、上肢・下肢ともに重度の困難さを抱えている。
- ・ 学習の中では書字やページめくり等は困難である。
- ・ 会話が聞き取りにくく、思いや考えを表現することに困難さや苦手意識がある。

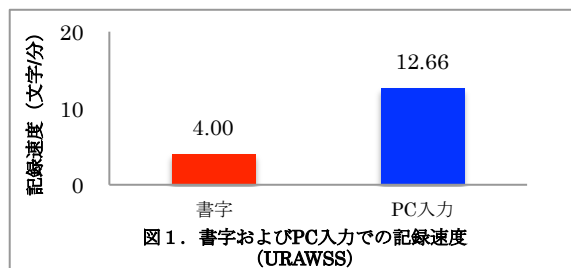


図 1. 書字およびPC入力での記録速度 (URAWSS)

【活動進捗】

○当初のねらい (計画書の学習目標) と活動による方向性の確認状況

学習目標

- ① 成功経験を増やすことで、自己肯定感を高め、適切な自己理解 (「一人で (楽に) できること」「支援を受ければ (楽に) できること」「機器を使うことで (楽に) できること」「一人でやった方がいいこと」「依頼した方がいいこと」等の把握) を身につける。
→昨年度の取り組みをもとに、学校外での自主学習、特に教科学習への応用を行うことで生徒自身により実感を持たせる。
- ② 自らで環境を調整することができるようになる (他者へ依頼することも含む)。
- ③ 他者に対し、自らの考えや要望を伝えることができる。
→②、③卒業後の社会参加を見据え、必要な環境調整能力を身につける。
- ④ 大学受験に合格できる学力を身につける。
- ⑤ 大学での学びのスタイルを確立することで、スムーズな移行につなげる。

○実施期間: 2015 年 4 月 ~ 2016 年 2 月

○実施者: 澤岷圭祐 (各教科担任、保護者等と連携をはかり実施中)

○実施者と対象児の関係: 教科担当

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・ 知的な遅れはなく、学習の理解度は高い。小、中学校は支援員をつけながら普通校 (通常学級) に通っていた (支援員は主に身辺処理や代筆、教科書めくり等の支援を行っていた)。
- ・ 昨年度から空欄補充型授業プリントを PC (キーボード、トラックボール型マウス使用)、iPad で入力しながら授業に参加している (図 1-1、1-2)。
- ・ 授業における ICT 機器活用は高等部入学後から始めている。昨年度「魔法のワンド」プロジェクトに参加し、これまでできなかったことや苦勞していたことが「(楽に) できる」ようになったことで少しずつ自分に自信を持ち始めている。

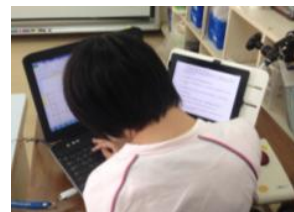


図 2-1. 授業の様子



図 2-1. 活用している機器

○ 活動の具体的内容

現在は、昨年度の取り組みを振り返りながら、以下のように取り組みを進めている。

学習環境の整備及び受験に向けた配慮申請 (①～②については昨年度の取り組みを継続)

① アクセスしやすい「教科書」作り

教科書の書籍としての「形」が生徒 A にとって活用しづらく、常に他者が傍らにあり、支援を依頼しなければならない (図 3)。

→保護者へ協力を依頼し、教科書や定期試験の問題を PDF 化し iPad に取り込むことで、生徒 A にとってめくりやすく、生徒 A にとって活用しやすい「形」の教科書にした (図 4)。



図 3.以前の学習の様子

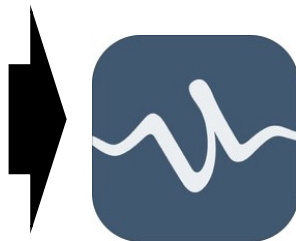


図 4.現在の学習の様子 (左は活用したアプリ UPAD 3、右は iPad 画面上の教科書)

※ PDF 編集を行うためのアプリは他にもたくさんあるが、その中で「UPAD 3」というアプリは①生徒 A にとって難しいスワイプという操作をしなくてもページを前後にめくれること、②メモを貼り付けたりすることができ、その入力がオンスクリーンキーボードでできること、③アンダーラインを引いたりする機能などが豊富であることなどの理由で活用している。

② 試験及び模擬試験受験時の環境作り

障害によって、試験時に紙媒体の問題用紙ではめくりが困難で、時間がかかり身体的にも負担がかかってしまう。また、通常のマークシートなどの解答方法では能力を発揮しづらい (図 5)。

→模擬試験でも能力を発揮出来るような「環境」を整えるために、模擬試験に取り組みながら生徒 A に適した手立てを検討している。その際に、東京大学先端科学研究センターの近藤武夫准教授からの助言や DO-IT Japan の取り組み、「大学入試センター試験における配慮」の例を参考に時間延長、また、書字に困難さがあるため問題用紙を iPad に、解答用紙を PC での入力に変更した (図 6)。

※ 試験時間については、試験中の様子を見ながらある程度柔軟に対応し、実施した。

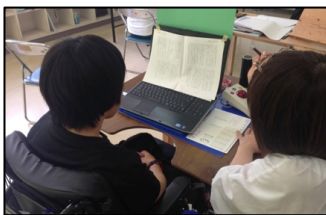


図 5.以前の模擬試験の様子

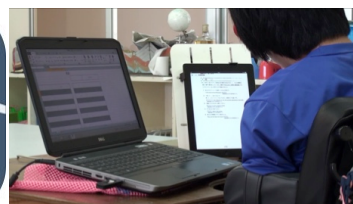


図 6.現在の模擬試験の様子 (左は活用したアプリ UPAD 3)

③ 大学受験に向けた志望大学との調整

これまでの取り組みをもとに「配慮申請書」を作成し、志望大学に対して配慮申請を行った (志望大学との調整を下記の流れのように複数回行った)。

大学との調整の流れ (各試験形態に対して毎回申請を行う)

1. 配慮申請についての流れや日程の確認 (前年度)
2. 申請 (~ 6 月)
3. 配慮申請及び診断書の作成と提出
4. 申請結果の通達
5. 大学からの出願書類の提供
6. 出願書類の作成・提出

図 7. 配慮申請書

7. 受験（一次試験・二次試験）

8. 結果発表

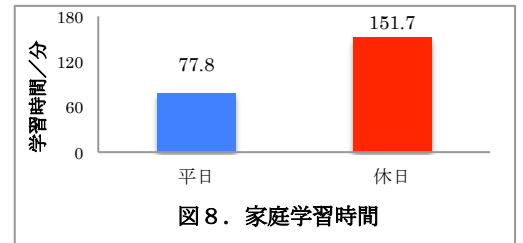
配慮の内容（AO入試出願用：内容については生徒本人の意向をもとに作成）

1. ノートパソコンやタブレット型パソコンの使用および代筆、代読受験
2. 車椅子のため身体障害者用トイレの使用及び試験会場の配置
3. 他の受験生と同様の休憩時間の確保
4. 出願書類記入等でのパソコンの使用

大学合格に向けた学習保障 日々の授業だけでなく、宿題や家庭学習の環境整備を行った。

① 家庭での自主学習に関する実態把握

対象生徒に家庭や寄宿舎での自主学習の内容などを毎日LINEで報告してもらい、学習時間や教科等についての実態を確認し、対象生徒にあった自主学習の方法を検討、改善している。



② 身近な教材を活用した学習への取り組み

NHK 高校講座や沖縄県総合教育センターが管理運用している「インタラクティブ学習システム」(図9)を活用し、学習しやすい環境を整えている。



図9. 身近な教材
(左：高校講座、右：インタラクティブ学習システム)

③ OneNoteを活用した学習

市販の問題集では時間がかかり、書き込みができない等の理由から活用しづらく、自主学習が暗記や授業プリント中心の復習が主になっていた。そのため、受験に向けて「問題を解く」という経験を積むため、OneNoteを活用し、PCで書き込める問題集を作成、活用。

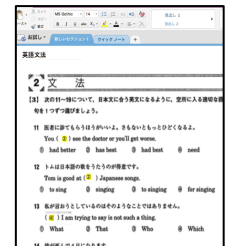


図10. OneNoteの活用

④ 板書の記録や代筆によるノートテイクの有効活用

数学など一部の教科については、PCでの入力等に特殊記号やアプリケーションを必要としてしまうため代筆で記録。しかしながら、ノートへの記録だと「紙媒体」であるため、Aさん一人では活用しづらい。→「SHOT NOTE」というルーズリーフとアプリを活用し、簡単にPDFに変換し、活用しやすいようにすることで学習の振り返りを行いやすくする。

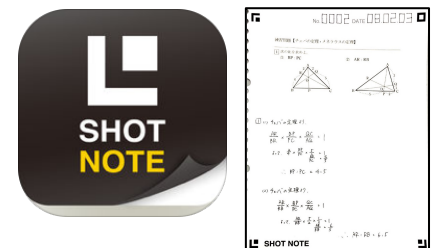


図11. SHOTNOTEの活用
(左：使用したアプリ、右：PDF化されたノート)

大学入学後を見据えた取り組み（大学での学びのスタイルの確立）

① 大学との話し合い（ケース会議）

大学入学後の学習環境等について大学関係者（学科長、福祉・ボランティア支援室など）と保護者、本校職員（担任、進路指導部など）を交え、ケース会議を行っている。

（10月から実施。現在の支援の内容や方法等について情報交換を行い、大学での支援方法についての要望を行っている。）

本校からの要望

実際の講義を受講し、どのような配慮が必要なのかを確認していくことでスムーズな移行に繋がりたい。



図12. ケース会議の様子

② 実際の講義を体験

大学の講義を2日間計5コマ受講。「①講義室などの大学の設備の確認、②講義内容（スピードなど）の確認、③大学が現在障害を有する学生に提供している支援を確認、④高等部での取り組みが大学の講義でも有効かの確認、⑤卒業までの期間高等部でどのようにして取り組んでいくかの指針を確認」することを目的として実施。



図13. 授業体験の様子
左：授業の様子、中：代筆サポート、
右：代筆サポートの記録したノート

③ 大学への要望を再検討。

体験を終えて、再度大学での学びのスタイルについて生徒本人と相談しながら、再検討し、大学へ再度要望。要望内容

1. 代筆サポート
2. 講義の資料（スライド）を紙媒体ではなく、データでの提供。
3. ボイスレコーダーやカメラアプリの活用許可

→1については了承していただいたが、残りの2点については講義担当と調整していく。



図14. 実習の振り返り

④ 合理的配慮に向けた学習

「法令をはじめとする社会の流れ」や「合理的配慮」についても少しずつ理解を深め、卒業後も生徒自身で大学への申請やその後の社会に働きかけていけるような取り組みを始めた。

対象生徒の事後の変化

AO入試で志望大学に合格することができた。

① 学習環境の整備及び受験に向けた配慮申請を通して

自分の能力を発揮するために必要な調整としてタブレットやPCを活用が当然になっている。また、大学に入試の面接において「現在、本学でPCやタブレットを活用している生徒はいないのですが、あなたはどうしますか」という質問に対して「(自分にとって)ICTは必要なもので、大学でも教科書や資料を取り込んで活用したいので認めていただきたいと思っています」と具体的な活用内容を踏まえながら答えたり、発表などの場面でプレゼンテーションアプリを活用したりする姿が見られるようになっている。

② 大学合格に向けた学習保障に関して

家庭学習の中で暗記中心だった学習がオンライン教材を活用することでいろいろな学び方や「もう一度じっくり学び直したい時には講義形式の高校講座を、さっと復習したい時にはインタラクティブ学習システムを」といったように状況に応じた学び方ができるようになっている。

③ 大学入学後を見据えた取り組みを通して

これまでは自分の意見や要望を伝えることが少なく、どこか受身的な関わりが多かったが、大学との話し合いに参加し、大学へ保護者や職員が大学側に要望する姿を見る中で、自分の意見や要望を「伝える」ことの重要性を意識し、自らの口で訴えることができるようになってきている。また、そのような変化は様々な場面で見られるようになっている。

報告者の気づきとエビデンス

報告者の主観的気づき

今回の取り組みの中で、「(これまで発揮することができなかった)自分の持っている力がICT機器を活用することで発揮でき、志望大学に合格することができた」ことで、「ICT機器も自分の能力の一部と考えてもいいんだ」「自分の能力を発揮するために環境を整えてもらったり、訴えたりすることは大事なことなんだ」という意識が育っていると考えられる。また、そういった中で自信を深め、高等部1年生時には発言も消極的で、受身的な言動が多かったが、今年度は「Do-It Japan」にも興味を持ち、家族を説得し応募している。このようなことは高等部1年生時の彼女からは想像もできない姿である。そのような点からも成長が伺える。そのような積極性は、大学受験に向け英検対策のアプリを活用しながら学習したり、インターネットで「面接対策」を自主的に調べたりする姿も多く見られるようになっている。

エビデンス

学習環境の整備について

- 教科書やノート(プリント)などを全て電子化したことで、周囲への依存度が格段に減少した。生徒自身も電子化することによって楽に学習することができるようになったことで、「大学でもテキストをタブレットに取り込み学習していきたい」と大学入試の面接でも答えている。

- 模擬試験でのICT機器活用等により、模擬試験で彼女の持っている実力を数値として表出することができるようになった。同様の取り組みを計3回行っているが、①実力(理解できている部分とできていない部分)を正確に捉えることができたこと、②どの模擬試験においても制限時間内に全ての問題について解答することができている。高校入試時には全ての問題に目を通すことができず、確かめ等もできなかったということと比較しても彼女に対し、ICT機器の活用等について有効であったと考えることができる。

	英語	数学	国語	合計
配慮なし	29.0	46.0	53.0	128.0
配慮あり	43.0	49.0	63.0	155.0
全国平均	40.9	57.9	64.8	163.6

表 1.手立ての変化による試験結果例

- 上記のようなエビデンスを踏まえた配慮申請を行ったことで、AO入試の際に志願理由書を電子データでいただくなど、能力を発揮するための環境を整備できた。生徒自身もPCで入力できたことで「(手書きより)しっかりと文章を書くことができ」、「(代筆だと気を使っていて書きにくいことも)自分の考えをきちんと書くことができた」。そのようなことが志望大学合格につながっていると考えられる。

学習保障に関して

- これまでの家庭学習では「他者からの支援が必要」「時間がかかってしまう」「学習方法が限られている」などの理由から、彼女の家庭での学習は「宿題や暗記が中心」の学習で、問題を解いたりする経験が不足していた。これに対して、いろいろな学習方法を提供した。そうすることで自分にあった方法を彼女自身で試行錯誤しながら取り組む姿が見られるようになっている。この取り組みが、大学受験やその後の学生生活の中で有効な手段になっていくことが考えられる。

大学入学後を見据えた取り組みを通して

- 大学の講義について入学前に体験できたことで、大学生活がより具体的にイメージすることができ、生徒のことについて早い段階から大学側と情報交換できたことで入学後のスムーズな移行につなげることができていると考えられる。また、大学と生徒(保護者)だけでなく、職員も加えたケース会議を行っていることでこれまでの取り組みや特別支援学校の専門性やノウハウを三者で共有できていることで、配慮や支援体制の構築につながれていると考えられる。

エピソード記録：生徒本人の感想（聞き取りから）

鏡が丘特別支援学校に入学し、魔法のプロジェクトに参加したことで自分にあった学び方を見出すことができ、大学に合格することができた。（このプロジェクトに参加するまでは）自分は健常の友達と同じような学び方できると思っていた。しかしながら、iPad やパソコンを活用して勉強が楽にできたり、模擬試験でいい結果ができたことで、少しずつ自信をもつこともできるようになった。この学校に入学しなかったり、このプロジェクトに参加しなかったら、いつかどこかで挫折していたと思う。私はこのプロジェクトに参加して良かったと思う。

【今後の見通し】

今後の取り組みでは、「大学で学習しやすい環境を整える」ことを第一に取り組んでいきたい。そうすることで、大学や社会で生活していく際に「自ら学んでいける」ための方法やそのような環境を調整する態度を育てていきたい。また、現在の彼女の様子を資料としてまとめて移行支援計画として作成していく。そのため、今後も大学とのケース会議や情報交換を継続していきたい。また、追指導として大学入学後の定期試験等の配慮等についてもつなげていきたいと考えている。

最後に、卒業後「自ら必要な支援や配慮を訴えていける」よう、今後も社会の流れなどについての指導にも継続して取り組んでいきたい。